2歳児たちのイチゴ物語
～ 続・「1 歳児たちのケーキづくり」 ～

社会福祉法人喜慈会　子中保育園
篠香澄[1]・桑田幸生[2]・大塚裕子[3]

1. はじめに

1.1 育てる・遊に・食べる

神奈川県厚木市の郊外にある小さな子中保育園。周囲は畑に囲まれており、その一角には自園の畑である「こなか農園」がある。近所の農家の方々から、収穫した野菜や果物、あるいは種や苗をおすそ分けしていただくこともある。恵まれた環境である。

子どもたちは芋掘りのような行事だけでなく、日頃から野菜や花の種・苗を自ら買いに行き、植え付けをし、草むしりをする。給食で出た生ゴミや残飯をコンポストに運んで肥料にし、肥料蒔きや水遣りをして野菜や花を育てている（図 1-1-1）。子どもたちにとって、これらは様々な気づきや発見を促す大切な仕事であり、遊びである。

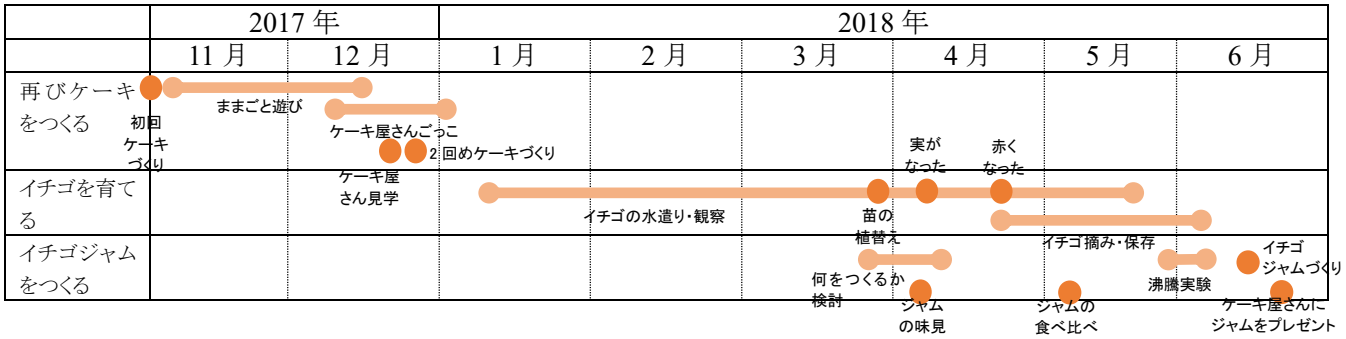
自分たちで育てた野菜は給食で友達や先生と、あるいは自宅に持ち帰って家族と、自分たちで育てたことを話しながら食べる。子どもたちにとって「育てる・遊ぶ・食べる」という活動が日常に根ざしている。

図 1-1-1　日常に根ざした「育てる・遊ぶ・食べる」活動

1.2 続・「1歳児たちのケーキづくり」

子中保育園では子どもたちの興味・関心に基づくプロジェクト型の保育を実践している（福田　2017[4]）。一年間の年間計画により歳時や保育の行事を行うことはあるが、計画に基づいた保育士主導の保育実践はあまり多くない。プロジェクト型の保育では、子どもたちの興味・関心が表れた言葉や行動を保育士が拾い、その興味・関心を広げ深めるような環境づくりを行うことにより、子どもたちが遊びを展開していく。この保育実践により、第 12 回食育コンテストで「1歳児たちのケーキづくり」で優秀賞を受賞した。当該の実践では、1歳児たちによる砂場でのお誕生会ごっこから本物のケーキづくりに至るまでのプロセスを記録した（事例集 2018[5]）。

表1　イチゴをめぐる食育活動の展開



本稿で報告するのは、そのケーキづくりの後に再び行ったイチゴのケーキづくりから、イチゴ栽培を通して収

---

[1] 筆者、保育実践者、保育士
[2] 保育実践者、保育士
[3] アドバイザー、副園長
[4] 福田泰雅，主体的な遊びとしてのプロジェクト・アプローチによる保育，発達，150 号，pp.42-50，2017，ミネルヴァ書房.
[5] KIDSEXPRESS21，食育　みんなで育むおいしい笑顔　～第12回食育コンテスト活動実践事例集～，2018

穫したイチゴによるジャムづくりをするまでのプロセスである。筆者の日誌に基づきまとめた。1歳児たち4名のクラスには、2018 年 4 月から2名が加わり、6名となった。この三つの活動（2 回めのケーキづくり、イチゴ栽培、イチゴジャムづくり）を柱として様々な遊びが展開した。展開の様子を表1にまとめる。横軸の時系列にそって、三つの柱ごとにどのような活動が展開したかを概観できる。各遊びについて詳しくは2章からの本文で示す。

ここで本稿の登場人物を示す。1歳児は Ri, Ru, Ko, Ma の4名、2歳児は、左記4名に加え 4 月に入園した Sho, Mo である。本稿の内容を実践した保育士・篠（以下筆者と記す）および桑田は実名で登場する。

2. イチゴ物語 ～育てて作って食べる～

2.1 再びケーキをつくる

ケーキ屋さんごっこ [2017 年 12 月 13 日]

10 月 30 日に行った“1歳児たちのケーキづくり”から約1カ月後。1歳児たちは『クリスマスパーティが始まるよ』という仕掛け絵本を読んでいた。ケーキのページを見て、Ru が仕掛けを動かしながら「クリーム出た！」と話す（図 2-1-1）。側にいた Ko が「ほんとだ！」と言って同じ仕掛けを動かした。

図 2-1-1 クリーム絞りのしかけを動かす

絵本を読んだ後、改装したキッチン台の使い方を子どもたちに伝える。ままごと用のキッチン台にオーブンと冷蔵庫を設置したのである。その際、「ケーキもオーブンで焼くんだよ」と言いながら、オーブンにケーキを入れて焼く真似をした。すると、Ru はすぐにワンホールのケーキの玩具をカットし始めた。カットしたケーキを皿に乗せて Ko が座る席に運び、「はい、どうぞ」と差し出す。Koも「いただきます」と言ってケーキを食べ始めた。その後、二人で絵本を読み、お茶会ごっこをする。

しばらくして、Ru がキッチン台からケーキの玩具を取り出した。テーブルに並べ、「いらっしゃいませ」とケーキ屋さんごっこを始める。桑田が「ケーキください」と言うと「ちょっと待ってください」と答えてケーキを切り、桑田に渡す。桑田が「入れ物ないね」と言うと、Ru は箱を持ってきてケーキを入れた。「はい、どうぞ」と詰め終わった箱を桑田に渡す。Ko がお皿を持ってきたので、桑田がケーキを並べると、Ko もケーキを箱に詰めた。

＜考察＞ クリーム絞りの動作への関心は、2 回めのケーキづくりへの予兆を感じさせる。クリスマスの絵本から子どもたちが反応した。この事例で興味深いのは、1歳児たちが、“食べる”という行為について、提供する人、食べる人の役割があることを理解し、それを実際に行っていることである。Ru と Ko の行動がそれを示している。

また、ケーキ屋さんでは店員が何を行っているかを把握したうえで、ごっこ遊びをしている点も興味深い。1回めのケーキづくりの後、ままごと遊びはしていてもケーキ屋さんごっこはしていなかったため、きっかけは絵本と考えられる。“1歳児のケーキづくり”プロジェクトの間に行われていたケーキ屋さんごっこのときよりも役割分担や、役割の言動、やりとりが本格的になっている。以前に行ったケーキ屋さん見学というリアルな体験や本物のケーキづくりの体験が身に付いていると考えられる。

クリームしぼりの遊び [2017 年 12 月 15 日]

クリスマスケーキのカタログを見せながら、1歳児たちと筆者は次のようなやり取りをした。

No.	話者	発話	備考
1	筆者	これ見て。かわいいね。クリスマスのケーキが載ってるよ	子どもたちが集まる
2	Ru	わぁ、ケーキだ。イチゴあるー	言いながらイチゴのケーキを指差す
3	Ko	サンタさん	サンタのケーキ飾りに反応する
4	筆者	今度クリスマスケーキ、つくってみる？前にケーキつくったの覚えてる？ケーキにクリーム塗って、みかんとかバナナを飾ってつくったね	
5	子	うん	全員反応する
6	Ko	ぬりぬりするー	
7	筆者	そうだね。またぬりぬりしてみよう。でもね、今度はクリーム塗るだけではなくて、ホイップクリームをぎゅーって絞ってみるんだよ。ここは（カタログを指しながら）ぎゅーっと絞ったからできたんだよ	言いながらクリームのデコレーション部分を見せる

8	Ru	ぎゅーしてみたい	
9	筆者	やってみよう！クリームを絞っている動画を見てみよう	図 2-1-2

この後、筆者はクリーム絞りの練習のため、白の花紙を入れた細長い筒を用意した。Ri がこの筒を持ち、花紙を搾り出す作業をし始めた。最初は両手で上部を絞っていたため出てこなかったが、筆者の援助により（図 2-1-3 左）、片手で下部を持ち、片手で上部を持って搾り出す動作を行えた（図 2-1-3 右）。Ko は Ri 同様クリーム絞りに興味を持った。筆者が白い箱をケーキに見立てて置くと、その上に花紙を搾り出していた。筆者の動きをよく観察していた。Ru はケーキカタログを見て、ケーキ屋さんごっこをし、桑田に渡す。桑田が「これはどのケーキ？」と尋ねると、「これだよ、イチゴのケーキ」とカタログを指して答える（図 2-1-4）。

図 2-1-2 クリーム絞りの動画を見る

図 2-1-3 クリーム絞りの練習

＜考察＞ このときあえて筆者からケーキづくりを提案したのは、前回のケーキづくりが単なるイベントとして終わらず、子どもたちに体験として身に付いているか確認したかったためである。また、子どもたちが興味を持ったことから、前回には無かったクリーム絞りを使ったデコレーションを行うことにした。クリーム絞りはヘラで塗るよりも難しい工程である。子どもたちは筆者とともに動画を見てイメージを共有しながら、“搾り出す”という動作を体験的に学んでいる。また季節柄、イチゴやサンタの飾りの載ったクリスマスケーキを、作るケーキとしてイメージしていると感じる。

図 2-1-4 イチゴのケーキへの関心

ケーキ屋さん見学 [2017 年 12 月 25 日]

再びケーキをつくることにした子どもたち。作るケーキのイメージを共有するため、ケーキ屋さん見学にも再び出かけた。店に入ると真っ先に Ma が「先生、あったよ、見て見て！」とイチゴのショートケーキを指差した（図 2-1-5）。筆者が「本当だ。イチゴと生クリームだね。保育園で見たのと同じだね」と答える。クリームとイチゴでサンタクロースのようにデコレーションしたカップケーキを見て、Ko が「先生、ケーキだ。ケーキ！」と喜ぶ。筆者が「ここにあるケーキ、見たことあるね」とクリスマス用に飾り付けられたワンホールのショートケーキを指差した。「サンタさん」「クリームだ」「これ、これ」と言いながら、子どもたちもクリスマスケーキを指差した。

図 2-1-5 イメージの確認と共有

＜考察＞ ケーキ屋さんに入ると、保育室で見ているイチゴが乗った生クリームのデコレーションケーキに、「きれい！」と反応していた。子どもたちの様子からみんなで行うケーキづくりのイメージが共有できたと感じる。

イチゴのケーキづくり [2017 年 12 月 26 日]

2 回めのケーキづくりに対して、1歳児たちは前回以上に期待をし、作る意欲が高まっていた。当日登園時に「今日ケーキつくる」と話す様子や、保護者から聞く家庭での様子から、それが伺える。活動開始時、筆者は「今日はケーキをつくります」と言って材料や道具を見せた。

No.	話者	発話	備考
1	筆者	これなんだ？前に、これで何したかな？	ホイップクリームを出しながら
2	子	「クリーム！」「クリーム、ぎゅーする」	子どもたちは嬉しそうに口々に応える
3	筆者	そうだね。今日後でクリームをぎゅーします。	そう言いながらヘラも見せる
4	Ru	クリーム、ぬりぬりしたい！	

図 2-1-6 クリーム塗りに慣れている子どもたち

ヘラとボウルに入ったクリームを子どもたちに渡すとすぐに塗り出す（図 2-1-6）。Ko はボウルの中のクリームがなくなると、ボウルの内側をかき集めている動作を見せた。塗り終えて納得すると、ヘラを置き、次の動作を待っていた。クリーム絞りのデコレーションでは、Ri が練習成果を発揮していた。クリームが少なくなると、絞り器の上部から下部に向かって押しながらクリームを集めて搾り出していた（図 2-1-7④）。クリーム絞りの後、イチゴの配置では全員でバランスを考えながら置いていた（図 2-1-7①②）。食べる際、筆者が「おいしいね」と言うと、Ru が「おいしいね。ケーキつくったの」と自分でつくった喜びを表現していた。

＜考察＞　筆者は 12 月 15 日の考察で、ケーキづくりの目的として、今回の試みが前回のケーキづくりを土台とした経験になるかどうか確かめることだと書いた。活動の最初にヘラを見てすぐ道具の機能や使途がわかったこと、自分たちでクリーム塗りの作業の終わりを決められたこと、次の動作を予測して待てたこと等の行動から、前回の経験が蓄積されていると感じた。また、イチゴを並べる際には、バランスを考えながら全員で置いていた。このことから、ケーキ屋さん見学により子どもたちがイメージを共有できていたこと、共同作業として協力し合っていることが感じられた。クリーム絞りでは練習の成果が出て、とてもきれいに搾り出すことができた。上手に行うためには練習が必要であることを、子どもたちの食育活動や遊びを通して伝えられたと感じている。

図 2-1-7　2回目のケーキづくりにチャレンジ

2.2 イチゴを育てる

イチゴを育てることを伝える　[2018 年 1 月 12 日]

12 月の末に、ご近所の農家の方からイチゴの苗を頂いた。苗を見ながら、みんなで育て、3 月～4 月に植えることを伝える。Ma は前日すでに園の駐車場に置いてある苗に水遣りをしていた。

No.	話者	発話
1	Ko	(イチゴ)植えたい！
2	Ma	(水遣り)やった。
3	筆者	**うん、イチゴさんができるには毎日お水をあげるんだよ。イチゴさんのご飯はお水なんだよ**

玄関に 12 月 26 日のケーキづくりの写真が掲示されているのを見て Ko が言った。

No.	話者	発話
4	Ko	イチゴさんだ！
5	筆者	そうだね。さっき見たイチゴの苗あったよね？あの苗が大きくなると、イチゴさんができるんだよ
6	Ko	**大きくなる？(と言いながら不思議そうな顔をした)**

＜考察＞　この日の子どもたちとのやりとりはとても大切だと感じている。発話 3 に示すように、自分たちが食べているイチゴもまた、水という“ご飯”を食べて大きくなることを初めて伝える機会となった。一方、発話 6 のように、イチゴの苗が大きくなって花が咲き、実がなることを理解するのは 1 歳児(当時)には難しい。しかし、観察を続けていくことで、植物の成長を見て新しい発見や変化に気づくことがあると思う。そのときの反応が楽しみである。

毎日の水遣り

[2018 年 1 月 18 日]　1月 10 日(水)に、0 歳児と 1 歳児が近所のホームセンターでお花の苗を買ってきた。1歳児たちは、その花のプランターもよく観察している。プランターの苗は白や黄の花をたくさん付けていた。Ko は、そのような花を探すかのように、イチゴの葉をめくって花が無いかを確かめている。何も無いことについて少し残念そうにしているので、筆者が「今はね、イチゴさんは寝ているんだよ。暖かくなったら起きるからね」と話すと、子どもたちはイチゴの葉を触りながら「**ねんね**」と言葉をかけた。(図 2-2-1)

[2018 年 1 月 24 日]　イチゴの苗を見に行くと、Ko はすぐに葉を裏返しにして花があるか確認する。葉をめくりながら、「**やっぱり寝てる**」と表現する。

[2018 年 2 月 13 日]　イチゴの苗を見に行く。真っ先に土の状態を確認する Ko と Ri(図 2-2-2)。

図 2-2-1　イチゴを見守る

図 2-2-2　土の状態を確認する

図 2-2-3　植替えまでの三ヶ月にわたる毎日の水遣り

No.	話者	発話
1	Ko	サラサラしてるね
2	Ri	うん、サラサラしてるね
3	Ko	**お腹すいてるのかも**
4	筆者	そうだね。イチゴさん、お腹すいてるかもね。どうしようか
5	Ru	（少し考えて） お水あげる
6	Ko	うん、お水あげる

図 2-2-4 イチゴの植替え

＜考察＞ 子どもたちは変化が少ないイチゴの苗に毎日水遣りをし（図 2-2-3）、大切に育てた。イチゴの葉をめくる、「やっぱり」という言葉を使う、触れてみて土の状態を確認する等の行為は、毎日の観察に拠るものと考える。“イチゴさんもご飯を食べる”“他の花と同じように花があるはず”“イチゴさんが寝ている話は聴いたが、変化が無いことから（やっぱり）寝ているようだ”“土がサラサラだと水が無いからイチゴさんはお腹がすいている」等、毎日の観察や保育士たちとの日々の対話から形作った、子どもたちなりの仮説を確かめる行為、あるいはイチゴに対する愛情を実践する行為が見て取れる。

イチゴを植替える [2018 年 3 月 28 日]

暖かくなってきたので、一つずつポットに入っていたイチゴをプランターに植替える。長い間育ててきたイチゴをやっと植替えられた。プランターに土を入れる、ポットからイチゴの苗を出してプランターに植える、プランターを運ぶ、水遣りをする、これら一連の作業を各自で、ときには分担して力を合わせながら行った（図 2-2-4）。

図 2-2-5 イチゴの葉を観察する

イチゴの変化を話す [2018 年 4 月 3 日]

1歳児たちは 4 月 2 日に進級して2歳児クラスになり仲間も増えた。翌日の午前。

No.	話者	発話
1	筆者	今日はイチゴさんは大きいかな？小さいかな？
2	Ru	小さーい
3	Sho,Ko	大きい
4	筆者	そっかー。それなら大きいか、小さいか見に行ってみよう
5	Ko,Ri	これ大きいよ
6	Ri	これは小さい
7	Sho	せんせーい、これは大きいよ。（これは）小さいよ
8	筆者	ほんとうだね、みんなよく見ているね

＜考察＞ 子どもたちはイチゴの葉の大きさに注目しながら観察している（図 2-2-5）。水遣りは以前から楽しんでいたが、植替えをしてから日に日にイチゴも大きくなっている。その様子に子どもたちもイチゴの成長を楽しみにしている。

イチゴの実がなった [2018 年 4 月 10 日]

子どもたちは今日もイチゴを観察しに園庭に出る。

No.	話者	発話
1	筆者	イチゴ、大きくなってるかな？
2	Ru	大きくなってる。あ、イチゴ！ （緑色の小さなイチゴを見つけて）
3	筆者	どんな匂いがする？
4	Ru,Ma	イチゴ
5	筆者	イチゴの匂いがするんだ
6	Ru	**先生もやってみて！**

図 2-2-6 イチゴの匂いがする！

＜考察＞ もちろん葉っぱの匂いしかしないが、子どもたちにはイチゴの匂いに感じるほど、イチゴの成長を喜んでいるのだと感じた。また、発話 6 の保育士に共感を求める Ru の姿から、緑のイチゴを発見した喜びが強く感じられた。

これ、食べられる？ [2018 年 4 月 27 日]

イチゴを見に行くと、子どもたちは急いでイチゴの色を確認する。

＜考察＞ 子どもたちの反応から喜びと興奮が伝わる（発話 1,2）。色を識別し、食べられるか否かを判断できるようになった。毎日の観察やイチゴに関する対話によると考える。

No.	話者	発話
1	Ru	**せんせーい、イチゴ見て見て！（図 2-2-7）**
2	Ko	**せんせい、見てー！**

図 2-2-7 イチゴが赤くなった！

3	筆者	なーにー？　色が変わってたの？
4	子たち	うん
5	筆者	何色になった？
6	Ru	あかいろ
7	筆者	これ美味しい？美味しくない？
8	Ko	美味しいの！
9	筆者	これは食べられる？食べられない？
10	Ko	これ、食べられる
11	筆者	（次は緑色のイチゴを見せながら）これは食べられる？
12	Ko	食べられない

2.3 イチゴジャムをつくる

ここではジャムづくりに関わる活動について記すため、植替え直後のエピソードにさかのぼる。

イチゴさん、大きくなったら何する？

[2018 年 3 月 29 日]

今朝のおやつはイチゴのジャムパン。

No.	話者	発話
1	筆者	今日のおやつのパンに何か挟まってるね
2	Ru	イチゴ！
3	筆者	イチゴジャムだね。昨日土入れて、水をあげたじゃない？あれ何だけ？
4	Ko	イチゴ！
5	筆者	**そうそう。あれが大きくなってイチゴができたらイチゴジャムが作れるんだよ（子どもたち全員、不思議そうな顔）**
6	Ru	**苗と一緒**
7	筆者	苗ってなーに？
8	Ru	イチゴの苗

同日夕方、イチゴの水遣りに行く。

No.	話者	発話
9	筆者	そういえば、イチゴさん、大きくなったら何する？
10	Ru	**イチゴクリーム、つくりたい**
11	筆者	イチゴクリームって、今日の朝、パンに塗ってあったやつ？
12	Ru	うん

＜考察＞　発話 5 の反応から、この時点では子どもたちはまだイチゴの苗とイチゴジャムが結びついていないようだった。Ru は、保育士の発言からイチゴと苗、イチゴとイチゴジャムという二つの概念の関係を結びつけ、「苗と一緒」（発話 6）を言ったと考えられる。体験と、体験に基づく会話から知識が結びついた。イチゴクリームはイチゴジャムを指していると思われるため、これまで同様、実際にイチゴジャムを見て食べる体験をしてみたい。

イチゴジャムを味見する　[2018 年 4 月 3 日]

15:00 のおやつ時にジャムの瓶を見せる。

No.	話者	発話
1	筆者	Ru ちゃん、この前、イチゴクリームって話してたでしょ？それって、イチゴジャムのこと？
2	Ru	うん
3	筆者	(イチゴジャムの瓶を見せながら) これのこと？
4	Ru	うん　（と大きくうなずく）
5	筆者	イチゴクリームは、イチゴジャムのことだったのね！イチゴジャム、ちょっと見てみようか？（と瓶を開けてスプーンですくうと子どもたちの目が大きく見開く）　これがイチゴジャムだよ。（と匂いをかぎながら話す）　味見してみる？
6	子たち	うん、したーい！
7	筆者	まずは順番に匂いをかいでみてね
8	Ru	おいしい～　（図 2-3-1）
9	Ko,Ma	イチゴ～
10	Ri	イチゴの匂いする～

図 2-3-1 イチゴジャムの味見体験

スプーンで一口ずつ味見すると、子どもたちは口々に味わいを表現する。

11	Ru	おいしい！
12	筆者	甘い？すっぱい？どんな味がするかな
13	Ri	あまい
14	Ma	あまいよ～
15	Ru	おいしい
16	Ko	すっぱい

＜考察＞　子どもたちにとっていつも食べているイチゴジャムも、イチゴを育てながら食べてみると、特別なものとして味わうという体験になる。食の体験の豊かな広がりを感じる。

図 2-3-2 二つのイチゴジャムの食べ比べ体験

イチゴジャムを食べ比べる　[2018 年 5 月 7 日]

桑田と筆者で食べ比べのためのジャムを用意する。桑田が用意したジャムは砂糖とともに煮詰めたイチゴの形が無いジャム(A)。筆者が用意したのは砂糖が含まれずイチゴの形状が残っているスプレッドタイプのジャム(B)。(筆者)「これね、どっちもイチゴジャムなの。でもね、色と形が違うんだよ。」子どもたちは口々に「イチゴジャム！」と言いながら、興味津々に喜んで頭を寄せてきた(図 2-3-2)

No.	話者	発話
1	筆者	こっちのジャム(A)はね、赤いんだよ。明るい赤でキラキラしてるの。こっちのジャム(B)はね色が暗いの。少し黒っぽいでしょ？
2	Ru	「黒～い」「赤い」(両方のジャムをじっくり見ながら)
3	筆者	同じイチゴジャムなのに面白いね。ほらこっちのジャム(A)はつぶつぶが見えるね。こっちのジャム(B)はイチゴの形が見えるね
4	Ru	つぶつぶある～
5	筆者	あるね。二つとも同じイチゴジャムなの。みんながつくるイチゴジャムはどっちかな？
6	子たち	こっちー(Aを指差す)
7	筆者	こっち(Bを指す)
8	Ru	みんな違うね。みんなで今度ジャムつくろうね
9	Ko,Ma	うん(大きく頷く)

＜考察＞　イチゴジャムづくりに向け、ジャムにも色々な種類があることを体験することができた。子どもたちのジャムづくりへの期待感もいっそう高まると思う。

図 2-3-3 イチゴを摘む

図 2-3-4 イチゴを保存する

イチゴを摘む・保存する　[2018 年 5 月 10 日]

筆者がイチゴを摘むときに使うボウルを持っていると、Ko がやってくる。

No.	話者	発話
1	筆者	Ko ちゃん、どうしたの？
2	Ru	イチゴ見に行く
3	筆者	Sho ちゃんも行きたい
4	Ru	それなら 3 人で行こうか
5	筆者	今ね、イチゴジャムを作るためにイチゴを摘んだでしょ？イチゴジャムのイチゴはね、きれいに洗って袋に入れてから凍らせるの。きれいなお水で洗うんだけど、やってみる？
6	Sho	うん
7	Ko	きれいにする！(洗い方を見た後、二人で取り組む)(図 2-3-4)
8	筆者	きれいにできたね！今、イチゴがぬれてるよね？今度はこれをティッシュで拭いてみて

小雨が降っていたのでカッパを着させる。Ko と Sho は成っているイチゴ全体の色を確かめながら摘んでいた(図 2-3-3)。保育室に戻ると、筆者はボウルと水を用意した。

ふたりはティッシュを持ち、イチゴの水気を優しく丁寧に拭き取る。5～6個しかなかったため、もっとやりたい様子だった。保存密封用の袋に砂糖をまぶしたイチゴを入れる様子を二人に見せる。

図 2-3-5 ジャムづくりの動画を見る

＜考察＞　ジャムづくりに向けての準備を進めている。子どもたちの丁寧な作業から、大切に育てたイチゴへの愛情やイチゴジャムづくりに向けての期待感が感じられる。

鍋が熱くなることを知る　[2018 年 5 月 31 日, 6 月 6 日]

ジャムづくりの準備として沸騰の実験を 2 回行った。最初に iPad でジャムづくりの動画を見せた(図 2-3-5)。鍋に火をかけるシーンで止めた。保育士から「ぶくぶく熱いよね。」と話すと「ぶくぶく熱い。」「火傷する。」などの反応が見られた。熱いと砂糖などが解けることも伝えた。実際に鍋を温める(図 2-3-6)。水が温まるまで時間がかかるが、子どもたちは集中して見ていた。鍋の中に泡が見えたので、筆者が「ほら、小さいぶくぶくが沢山あるよ」と言うと、Ma が「ぶくぶく熱いから触らない」と話す。

図 2-3-6 沸騰を体験する

＜考察＞　Ma はとくに「ぶくぶく熱い。火傷する」という発言が多かった。母親に話をしたところ以前家庭でジャムを作った時に熱い鍋を触ったという話があった。実体験があったからこそ熱い鍋を触らないという危険に対して

認識があったのだと思う。

今回の活動では、本物の鍋と火を使用してジャムづくりをする。火傷という危険がなぜあるかということを繰り返し伝えた。また、子どもたちが沸騰を理解するためにミラーシートを鍋にかざした（図 2-3-6）。湯気で曇るという変化により、熱いということを視覚から理解できたと感じた。

図 2-3-7 イチゴジャムづくり

イチゴジャムをつくる　[2018 年 6 月 19 日]

今日は念願のイチゴジャムづくりである（図 2-3-7）。子どもたちはワクワクした表情をしていた。鍋を使う時の約束を伝えると真剣な表情になり、電源を入れると子どもたちから「熱いから触ったらだめ。火傷しちゃう」という声が聞かれた。冷凍しておいたイチゴを子どもたちが鍋に入れる。少しずつ鍋が温まりイチゴから水分が出てきた。「イチゴからお水が出たんだよ。見てみて」と言うと、子どもたちは「本当だ」と興味深げに見た。鍋に注意しつつイチゴを潰したり、混ぜたりと、筆者と共に取り組んだ。冷めた頃にイチゴジャムの味見をすると、「甘い」「美味しい」と自分たちで作ったイチゴジャムを味わっていた。「ジャムはパンに塗るって言ってたけど、他にはどうする？何か作る？」と尋ねると、Ma が「これ作る」とイチゴのケーキの本を見て話す。その言葉を聞き、他の子どもたちの気持ちもケーキに向き盛り上がる。そんな話をしているうちに、ジャムが完成した。「出来た。やった！」と喜んでいた。

図 2-3-8 つくったジャムを食べる

図 2-3-9 小さい子・大きい子にもおすそ分け

おやつの時にはみんなで以前から話をしていた通りパンにジャムを塗る。自分で好きな量を取り味わう。「美味しいね」と友達と顔を合わせて共に味わっていた（図 2-3-8）。他のクラスにもおすそ分けをした（図 2-3-9）。自分で作ったものは本当に美味しいという感情が表情や言葉から見て取れた。今回作ったジャムを使ってケーキに活かせればと考えている。その話を Ko の母親に話したところ、家でイチゴジャムをケーキに使うことがあるとのこと。生クリームにイチゴジャムを混ぜるとピンク色になるためおすすめ、とアドバイスをもらう。

後日いつも何かとお世話になるケーキ屋さんにお礼にイチゴジャムを届けに行った（図 2-3-10）。パティシエのご主人はとても喜んでくださった。イチゴの苗をくださった農家さんは体調を崩されているとのことで残念ながら畑でお会いできずお渡しできなかった。イチゴの苗をいただいたことが今回の活動の大切なきっかけになっているのでとても残念である。

図 2-3-10 ケーキ屋さんにいつものお礼

3. おわりに

イチゴの苗を地域の方から頂いたことにより、子どもたちのイチゴへの関心は“食べる”だけでなく“育てる”に広がった。頂いた時期、イチゴの苗は休眠期だったため変化が見られない期間が続いたが、“イチゴができる”という期待感から、子どもたちは飽きることなく毎日の観察や水遣りを欠かさず、次第に生活習慣の一つになっていった。この間の子どもたちの気づきによる言葉や動きはとても重要であると思う。“自分たちが育てたイチゴをジャムにして食べた”という実体験は、子どもたちにとって感覚的なものであっても学ぶ意欲や生きる意欲の形成につながっていくと考える。それは“食べる”ということの本質だと思う。前回のケーキづくりに続き行った、今回の二回めのケーキづくり、イチゴ栽培、ジャムづくりがまた、次の食育活動に広がるきっかけになればと考えている。